

地域所蔵アーカイブズの保存活動の実践と意義

— 愛知県知多・牟山神社所蔵資料群の整理活動を事例として —

牧 野 由 佳

【要 旨】

本稿は、筆者が2022年から本格的に実践している民間が所有する歴史資料群の調査・整理活動について報告するとともに、地域住民とともにアーカイブズを保存・管理する意義を考察するものである。対象は愛知県知多市朝倉地区の氏神社である牟山神社に所蔵される歴史資料群である。

筆者のこれまでの調査から、牟山神社には近世後期から平成に至るまでの朝倉地区や同社に関する歴史資料が少なくとも1500点以上所蔵されることが確認された。しかし、明治初期以降、同神社には常駐する神職はおらず、2年で交代する氏子総代によって神社が運営されてきたため、歴史資料の適切な管理がなされてこなかった。筆者は同資料群の散逸を防ぐことを目的に住民と協働で整理することを提案し、2022年から作業を開始した。本稿では本活動のうち主に概要調査の報告を行なう。また、筆者と住民による資料の清掃や整理作業についても報告し、住民と協働で活動する意義を検討する。

地域のアーカイブズは、博物館や公文書館など資料保存上のメリットの多い公的な機関で管理される場合と、資料所有者が現地で管理する場合がある。いずれも「現地保存」とみなされるが、どちらを選択するかによって所有者・地元住民に与える影響は異なる。アーキビストや自治体職員は、その違いを認識し、各資料の性格や所有者の要望を見極めたうえで保存施設や保存方法を決定することが望ましいと考える。

【目 次】

はじめに

1. 朝倉地区と牟山神社の概要

2. 牟山神社所蔵資料群の保管状況

— 概要調査の記録から —

3. 清掃・整理作業

4. 地域でアーカイブズを保存する意義

— 博物館での保存との比較をとおして —

おわりに

はじめに

本稿は、筆者と地域の人々が協働で実施している地域所有の歴史資料群の調査・整理活動について報告するとともに、地域でアーカイブズを保存・管理する意義を考察するものである。筆者は、約10年前から愛知県知多市朝倉地区の牟山神社に伝承される民俗芸能「朝倉の梯子獅子」に関する民俗学的研究を続け、近年では聞き取り調査・参与観察などの民俗学的な調査に加えて、神社や朝倉梯子獅子保存会の所蔵する歴史資料を用いた調査・研究も行なっている¹⁾。

本稿で対象とする牟山神社所蔵資料は、筆者が同神社の氏子総代らの許可を得て社務所などを調査する過程で発見した。後に詳述するが、本資料は主に近現代の文書・記録類が中心で、神社に関わる資料の他に、朝倉地区の自治や青年団に関係する資料など地域生活に関わる資料も多数含まれる。筆者の研究において重要な資料であることはいうまでもないが、それ以上に地域住民にとって、自らの歴史を知るための資料としてたいへん貴重であると考えられる。

しかし、筆者が本資料を発見する以前は、同神社に多くの資料が残されていることは住民たちにほとんど認知されていなかった。同神社を日常的に管理する氏子総代や自治会役員らも資料の存在を認識しておらず、適切に管理されているといえる状態ではなかった。住民の中には砂埃にまみれた書類の山を見て、役に立たないので廃棄を検討した方が良いのではないかと話す者もいた。

こうした状況の中筆者は、地域に残る歴史資料の重要性を住民自身が理解し適切に管理していくためにはまず資料整理を行なう必要があると考え、氏子総代や住民に資料整理活動を協働で実施することを提案した。この提案は、氏子総代・朝倉梯子獅子保存会・朝倉地区の自治組織である朝倉協議会に認められ、地域の協力を得て2022年2月から本格的に活動を開始した。

2023年7月時点では、概要調査、清掃作業が完了した段階であり、アーカイブズの内容や構造を分析する段階には至っていない。そのため本稿では、経過報告として、現時点で完了している概要調査について報告し、地域で資料保存することの意義を中心に論じたい。

1. 朝倉地区と牟山神社の概要

愛知県知多市朝倉地区は、知多半島の北西部の伊勢湾に面した地域で、1950年代までは多くの住民が農業や漁業などで暮らしを立てていた。1960年代には沿岸部の埋め立てが開始され、埋立地は企業や工場が立ち並ぶ臨海工業地帯となった。これにより漁業に従事する者はほぼいなくなり、さらに内陸部の丘陵地帯や田畑の宅地開発が進んだ。現在の朝倉地区は、主として名古屋市などに勤務する人々や臨海工業地帯の労働者のベッドタウンとして機能している。

同地区の氏神社である牟山神社は、住民たちが朝倉山などと呼ぶ標高約35mの小高い山のふもとに鎮座する。旧来から住む人々を中心に牟山神社への崇敬は篤く、現在毎月第一日曜日に行なわれている月次祭には、多くの氏子が訪れる。

1) 歴史資料を活用した筆者の論考としては、拙稿「神宮式年遷宮における民俗芸能奉納と地域への影響—愛知県知多朝倉の梯子獅子を中心として—」（『儀礼文化学会紀要』9・10号、2022年）などがある。

牟山神社には明治初期までは常駐する神職がおり、代々、酒井権太夫という名を継承していた。同神社の所蔵資料に、1799（寛政11）年時点で八代目酒井権太夫が禰宜を務めていたとする記録があることから、近世初期もしくはそれ以前から酒井家が同神社の神職を務めていたと推測される。しかし、明治初期には常駐する神職はいなくなり、以後近隣の神社の神職が兼務するようになった。1919（大正8）年以降は、現在尾張八幡神社（知多市八幡）宮司を務めている森岡家が同社の神職を兼務するようになり、現在に至っている。

牟山神社の日常の管理は、地域住民の代表者である氏子総代が担っている。氏子総代は6名おり、3名ずつが2年ごとに入れ替わる体制をとっている。多くの住民が神社とかかわりを持ち、神社への理解を深めることができるシステムとして評価できるが、その反面、氏子総代の任期が2年間と短期であることから、日常業務以外の情報は引き継がれづらい。このような理由から、これまで同神社に所蔵される歴史資料の存在は忘れられていたのである。

なお、現在同社では、氏子総代は男性が担うことが慣例となっており、氏子の中には女性も社務所へ立ち入ってはならないと考える者もいる。筆者は女性であるが、氏子総代から特別に立ち入りの許可を得たうえで調査を行なっている。

2. 牟山神社所蔵資料群の保管状況—概要調査の記録から—

本節では、牟山神社所蔵資料群の概要調査²⁾について報告する。牟山神社所蔵資料群は、近世後期から平成時代までの史資料やモノ資料で構成される。近世期の資料の数は多くなく、近現代の文書・記録類や写真が中心である。史資料の内容は、祝詞や供物の記録類、氏子総代が執筆した日誌など神社に関わる記録・文書類の他に、『駐在員選挙名簿』、『夜番廻帳』、朝倉地区の戦後の青年団活動に関係する書類など地域の生活に関わる史資料も多数含まれる。文書数は現在確認中であるが、1500点以上あると推測される。また1799（寛政11）年に製作された木造の箱宮や、明治期の氏子札、神社の神事で使用していた旗類など、モノ資料も40～50点ほどある。

同神社に残される近世期の文書は、断簡がほとんどであるが、これらはまとめて卷子一巻に表装した状態で保存されている。卷子は「昭和三十一年十月十日新装」と墨書された桐箱に入れられていることから、1951（昭和31）年に表装されたことがわかる。

牟山神社の資料は、社務所内二か所と倉庫に分けて収蔵されていた。保存場所の一か所目は、社務所内の物置部屋に置かれた扉付きのキャビネット内である。ここには主に江戸時代から現代までの幅広い時代の神社に関連する史資料が保存されている（図1）。

キャビネットには四段の棚が設置され、さらにその下に二つの引き出しがある。最上段には、先述した近世文書をまとめた卷子の入った桐箱や、16mm映像フィルム、6mm音声テープなどが収められた正方形の桐箱などが収められている。上から二段目には、1937（昭和12）年に氏子総代によって作られた「書類函」や、えんじ色の書類箱（デスクトレイ）二箱（以上の箱

2) 本調査は、牛久市史編さん委員会・近世史部会『牛久市小坂・斉藤家文書概要調査報告書』（牛久市、1993年）、西村慎太郎「概要調査・現状記録再考—民間所在資料保存のために—」（『国文学研究資料館紀要』第9号、2013年）、国文学研究資料館編『令和4年度アーカイブズ・カレッジ テキスト』（2022年）などを参考にして実施した。

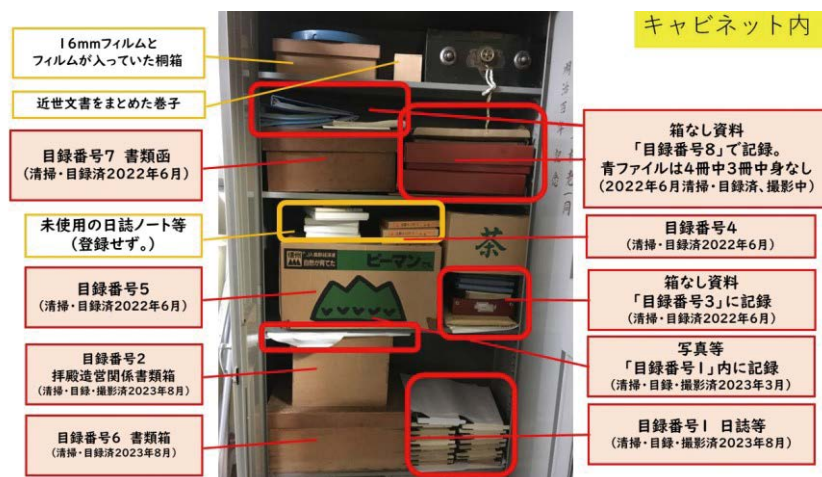


図1 キャビネット内に収蔵される資料（筆者作成の概要調査資料より）

内には主に昭和期の書類）、クリアファイル（中に書類は入っていない）など。上から三段目には、書類の入った封筒や段ボール箱（中には昭和から平成期の書類）、未使用の日誌帳などが保管されている。四段目には、1956（昭和31）年製の書類箱二箱（中には昭和期の書類）や、大正から平成期に氏子総代によって執筆された日誌、古写真・証書類が保管されている。古写真・証書類は、もとは額縁に入れ社務所内に飾られていたが、2020年末に社務所の掃除が行なわれた際に額縁が処分され、中の写真や証書のみが残された。最下段の引き出しには、昭和30～40年代の神社関連資料などが収められている。

また、キャビネット上には段ボール箱と破損した木箱が置かれていた。ダンボール箱には「重要書類 ロッカー内重要書類」と油性マジックペンで記され、箱内には平成時代の書類が入られていた。しかし、本ダンボールには虫害が見られたため、記録・写真撮影のうえ廃棄し、中の資料は異なる箱に移した。

二か所目の保存場所は、社務所内の物置部屋に設置された木製棚である。ここには、明治時代から昭和時代の神社に関連する資料が木製の箱に入れられている（図2）。木製箱の大きさ・形状はさまざま、計七箱ある。「祝詞箱」と記された祝詞奉書紙を入れるための桐箱（大正～昭和期）や、1883（明治16）年・1917（大正6）年製の各書類箱の他に、「提灯箱」と記された箱にも古文書が収められている。神事で使用する旗などが入った木製箱、掛け軸が複数本入った木製箱もこの棚に保管されている。また、木製箱の横には、1977（寛政11）年の本殿改築の際に製作されたと考えられる牟山神社の箱宮が保存されている。

上記の木箱や箱宮は、現在木製棚の上から三段目に収蔵されているが、筆者が初めて本資料を発見した際は、棚の上から二段目から四段目に分散して置かれていた。その後2020年12月末に、当時の氏子総代たちが大掃除として木製棚の整理を行ない、棚の三段目に集められた。整理前に概要調査を実施していなかったことから、本報告では整理後、三段目の棚に集められた状態を記録した。木製棚には文書資料のほかに、日常の神社管理に使用する道具や、例祭等の祭儀で使用する道具、防災用品などが保管されている。

三か所目の保存場所は、屋外に入口のある社務所の倉庫内である。本倉庫は氏子総代から



図2 木製棚に収蔵される資料（筆者作成の概要調査資料より）

宝蔵蔵と呼ばれている。木製箱二箱とプラスチック製衣装ケースに、主として明治時代から昭和時代の文書類が入れられていた（図3）。神社に関連する資料のほか、地域の生活や自治に関わるもの、朝倉青年団関連のものなども確認された。各箱には蓋は無かった。宝蔵蔵は、土足で立ち入る倉庫で、屋外で使用するムシロやロープ、ビニールシート、幟旗などの置き場でもあることから、資料は砂埃にまみれ、虫害などの影響が顕著であった。さらに、本倉庫の南面はすりガラスが設置されていること



図3 倉庫内の資料（写真は確認のために搬出した際のもの・筆者撮影）

から日当たりが良く、残された資料の状態は良いとはいえない状況であった。これ以上の資料の劣化を防ぐために、筆者は虫害・光害などの影響の少ない社務所内に移し保管することにした。

以上のように、牟山神社の資料は当初三か所に分散して蔵されていた。筆者は、牟山神社所蔵資料群に関しては、保存されていた場所によって、どの資料が過去に住民たちから重要視されていたかを理解できると考える。1950年代から1960年代、朝倉では一部の住民たちの間で、自分たちの歴史を振り返り考究する機運が高まった時期があったことが、筆者の調査により明

らかになっている³⁾。これは1959（昭和34）年に朝倉の梯子獅子が愛知県無形文化財（現在の無形民俗文化財）に指定されたことに伴うもので、指定の際に活動の中心となった人物らによって神社所蔵資料の点検も行なわれたようである。扉付きのキャビネット内の資料が梯子獅子や牟山神社の歴史に関わる資料が多いのは、当時の住民にとって重要な資料として選び採られたためと推察される。先に紹介した近世期の断簡を集めて表装した卷子も、神社の歴史を考究する中で古い記録類が重視されたことにより仕立てられたものだろう。このように一部の資料については、保存場所から1950年代から1960年代頃の住民がどのような資料を重視していたかを知ることができる⁴⁾。

3. 清掃・整理作業

概要調査後は、①資料のクリーニング、②簡易的な目録作成（仮目録、アイテムのデータ集積）、③資料の写真撮影を開始した。これまでに2022年2・3月・6月、2023年3月・4月・8月に作業を行ない、すべての資料のクリーニング作業が完了した。現在は、社務所キャビネット内の資料と木製棚の資料の簡易目録データ入力と写真撮影を行なっている。データ入力は全体の5分の1程度完了した。

また、倉庫内に保管されていた資料は、他の資料よりも虫害等の影響が大きいため、モルデナ・イベを購入し、気温の高くなった6月から6か月程度、無酸素処理による殺虫・殺カビを実施した。

資料の清掃作業では、整理の原則（出所の原則・原形保存・現秩序尊重の原則・記録の原則）に従い、当初箱に入れられていた順序を崩さないように実施し、変更を加える場合は記録を録りながら作業を進めた。現代の資料が多いことから、金属製のホチキス針やバインダーが多用されていたが、あまりに数が多いため、当該箇所に関する記録をとるにとどめ、取り外してこよりに付け替える作業は未実施である。今後はこうした細かな作業も行ない、資料の劣化を防がなければならない。

簡易目録作りにおいても、原形保存・現秩序尊重の原則に従い、当初の保存箱（各箱に仮の箱番号を付加）に入れられた順序のとおりアイテム一点ずつの資料番号を付し、入力を進めている。入力項目は、資料番号・資料名・年代・数量・法量・備考・仮箱番号としている。現時点は階層構造を模索する段階であるため、今後、全資料の仮目録を作成した後に牟山神社所蔵資料群の編成記述等を検討する予定である。

また、最終的に保存箱に収納する順序については、当初の保存状況が復元できる資料番号順で行なう予定である。資料番号を当初保存されていた順序通りに付加することで、新たな配置順を検討する必要性がなく、作業者ごとのバイアスがかかることもないため望ましいと考える。

上記の作業は、同社氏子総代や朝倉協議会の元幹部など地域住民とともに行なっている（図4）。「チーム牟山神社」と名付けられた本グループは、2023年現在、筆者を含めて11人で活動

3) 拙稿「知多半島「朝倉の梯子獅子」の戦後における伝承の変容—文字メディアの影響に注目して—」（『民俗芸能研究』69号、2020年）

4) ただし、キャビネットは昭和から平成期の氏子総代も使用しており、昭和中期の人々が重要視した資料だけでなく、近年の日誌や神社管理に関する資料など実務的な書類も保管されている。



図4 「チーム牟山神社」メンバーによる清掃作業の様子（2023年筆者撮影）

を展開している。参加メンバーは、古文書の取扱い経験があるわけではないが、居住する地域の古い資料の内容に関心を寄せたり、自身の先祖の名前を探したりしながら意欲的に取り組んでいる。このように、所有者である地域住民とともに活動を行なうことで、住民自身が資料に対する理解を深め重要性を認識する機会になっていると考える⁵⁾。膨大な資料の清掃作業が順調に完了できたのは、こうした地域との協働があったからである。

現段階では、清掃・写真撮影はメンバーとともに実施し、それ以外の作業は筆者が行なっている。効率的に作業を遂行するために、目録データ入力は一現地で行わず、調査地から帰宅後、撮影した資料画像を参照して入力する方法を取り入れている。チームのメンバーからは、入力作業も皆で分担して行なう提案を受けている。今後作業をどのように行なうかを検討していきたい。

4. 地域でアーカイブズを保存する意義—博物館での保存との比較をととして—

ここまで、筆者が現在進めている資料整理の活動の取り組みについて述べた。

ところで、朝倉地区のある愛知県知多市には、文化財保護・アーカイブズの公的な拠点として知多市歴史民俗博物館がある。筆者が以前、学芸員として奉職していた同館には温湿度管理された収蔵庫が設けられており、多くの地域資料が収集されている。本稿で論じてきた牟山神社資料群も寄贈や寄託の相談することも可能であった⁶⁾。しかし、今回は氏子総代らとの話し

5) しかし、作業が歴史資料の扱いに慣れていない場合は注意が必要である。参加者の中には、より早く作業を進めたいという思いが強く、資料の扱いが煩雑になってしまう人もいる。あまりに急いで作業行なうと手元が狂い資料を破ったり保存箱を落としたりするなど破損につながったり、現秩序保存の原則が乱れてしまうおそれがある。本取り組みでも不安になる場面があったことから、大きな事故を未然に防ぐために、現在は簡単な説明文を用意し、作業開始前に書面と口頭で注意喚起を行なうなど、慎重な作業の重要性の周知に努めている。

6) 近年各地の博物館で問題となっているように、知多市歴史民俗博物館の収蔵庫も収蔵スペースに

合いの結果、博物館に任せるのではなく、神社での保存・管理体制を構築する判断をした。

実は、朝倉地区の住民宅等に残されていた歴史資料の多くは、1960年代～1970年代に知多市⁷⁾に寄贈され、現在は同博物館が収蔵している。その中には、沿岸部埋め立て前に朝倉地区や近隣の古見地区の漁業従事者が組織していた新知漁業組合などに関する文書も含まれる。史料の一部は1972（昭和47）年に国指定重要有形民俗文化財となった「知多半島の漁撈用具附漁撈関係帳面類」（1045点附28点）の構成資料となった。このように、地域の資料が博物館に収蔵され歴史的・文化的意義が見い出されてゆくことは、住民側にとっても“自慢”となる。また、博物館で管理されることにより、資料の散逸や廃棄の防止にもつながる。民間で保存するよりも適切な環境下で保存されるため、劣化を最小限に防ぐことができ、資料の安全面においても望ましい選択である。神社など地域での保存は、管理者が代わる際の引継ぎ不足により資料の散逸のリスクがあるほか、博物館のように温湿度管理が徹底されていないため、天候や災害によって資料の劣化が急速に進むおそれがある。

その一方で、もともと所蔵されている地域での住民による保存・管理は、自治体の文化施設での管理とは異なる意義があると筆者は考える。住民の手元から離れず、地域内で保存・管理することで、住民は資料が自分たちの地域の所有物であると明確に認識でき、資料の背景にある地域の歴史や文化への関心も高めることができるのである。実際、今回事例として挙げた牟山神社の資料群の場合、氏子総代や自治会元幹部を中心とした住民で構成される「チーム牟山神社」のメンバーは同資料群を“地区の大切な資料”と認識するようになり、意欲を持って作業に取り組んでくれている。2023年度の氏子総代長のH氏は、筆者に次のように話してくれた。

牟山神社の歴史を知ることなく氏子総代を務めると、知り得て任務を果たすのでは大きく違ってくると思います。過去の資料を見ることで“へー”とか“なるほどな”と感じ、牟山神社に思いを入れ込んで務めるようになりました。

H氏だけでなく複数のメンバーが、活動の意義をそれぞれ言葉にしてくれている。博物館へ寄贈や寄託をして自分たちの手から離れた場合には、こうした意識は醸成し難い。住民自身が身近な場でアーカイブズの整理や管理に携わることによって、自らの歴史・文化に対する関心が高まることが期待されるのである。

博物館に寄贈した場合は、資料保存上の多数のメリットが考えられるが、旧所有者の住民にとっては資料が自分たちの手から離れるため、簡単に閲覧できない遠い存在となってしまう。先述した1960年代から1970年代に朝倉から市へ寄贈した資料群については、50年が経過して世代が代わったことにより、朝倉の住民の中で、自分たちに関わる歴史資料が博物館に保存されていることを知る者は、ごくわずかとなっている。

なお、知多市の博物館は、近年人員の削減などによって民俗学や歴史学を専門とする学芸員が不在の状態である。地域に残るアーカイブズ管理の相談窓口として専門職員が配置されることが本来望まれる姿と考えるが、博物館の現状として歴史資料の寄贈や寄託への対応が容易ではないことも、今回地域でのアーカイブズの保存を考えたもう一つの理由である。

1969（昭和44）年、日本学術会議は第55回総会において「歴史資料保存法の制定について」

余裕がない状況である。そのためどのような資料でも必ず寄贈や寄託の希望が受け入れられるわけではなく、博物館側との協議が必要である。

7) 1970（昭和45）年8月までは知多町であったが、9月に市制施行し知多市となった。

を勧告した。本勧告では、「歴史資料は、現地において現物のまま保存することを原則とする」とし、さらに現地保存の説明として「ここにいう現地とは、厳密には資料現蔵機関または現蔵者の所在する市区町村のことであるが、広義にはその市区町村の属する都道府県のことである」と記されている⁸⁾。つまり、地域博物館（自治体）での保存であっても、現所有者による保存であっても、「現地保存」に該当するとしている。

しかし、住民（現所有者）の立場に立つと、保存場所の違いによって、その後の住民と資料とのかかわりや資料に対する住民の意識に大きな差異が生じるだろう。アーキビストや自治体職員は、一口に「現地保存」と括るのではなく、その違いを認識し、各資料の性格や所有者の要望を見極めたうえで保存施設や保存方法を決定することが望ましいだろう。

本稿で挙げた朝倉地区の事例では、所蔵場所の環境や所有者との相談によって地域での保存に向け作業を進めているが、仮に今後状況が変化し神社での管理が困難になった場合には、博物館への寄贈や寄託を視野に入れる考えである。地域と関わる調査者や博物館などの専門機関は、地域社会の状況変化や組織の変化による資料の管理体制の弱体化と、それに伴う散逸など、将来的に起こるおそれのある問題を意識することも必要である。こうした問題から資料を守るために、調査者や公的機関は、地域の管理者などとの連絡体制づくりや、定期的な保存状況の確認を行なうことが求められる。資料整理やアーカイブズ化が完了した後も、アーキビストが継続して所有者や地域と対話し、資料や所有者の状況を把握し続けることにより、地域における現地保存の効果が高まると考えられるのである。

おわりに

本稿では、筆者が愛知県知多市朝倉地区で地域住民とともに実施している牟山神社所蔵のアーカイブズの保存活動の現状を報告した。また、「現地保存」のうち、特に地域での保存の意義について考察した。牟山神社のような小規模な神社は大規模な寺社とは異なり、資料の価値が住民からも認識されづらく、廃棄や散逸のおそれがある。一方で、現地での資料保存活動への参加を通じて資料の重要性を知ったという住民の声も聞かれた。

資料保存の意識・関心が朝倉地区の全体に広がるのは簡単なことではなく、今後、地道な活動が必要と考える。たとえば、住民の身近な場に資料が保存されていることを活かし、ワークショップを開催したり、公民館等を利用した展示会を開催するなど、住民とアーカイブズをつなぐ活動も一案として考えられる。現在は限られた時間の中で地道に活動している状況であるが、少しでも地域の人々に自らが居住する地域の資料への理解が深まり、保存の機運がより高まることが期待される。

また、現在調査中のため本論では触れることができなかったが、最終的な保存場所の検討や、保存器材の選定、資料群構造の分析、編成記述の作成なども徐々に進めていきたい。

筆者は、これまで朝倉の梯子獅子の民俗学的研究の中で地域の資料を活用することはあっても、アーカイブズを構築する活動に積極的に関わる機会はなかった。しかし、地域住民と長期

8) 日本学術会議ホームページの提言・報告等（1969年〈昭和44年〉）参照。<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/1969.html>（2023年7月24日最終閲覧）。

的に深くかかわり、地域の資料を目にする機会の多い民俗学研究者だからこそ、歴史資料の保存にも取り組むことが求められるように感じる。今後もアーカイブズに関して勉強を進め、微力ながら調査地の役に立てるよう努力したいと考えている。

付記

本稿は、2022年11月に実施された2022年度アーカイブズ・カレッジ（短期）の修了論文に加筆・修正を加えたものです。本稿執筆にあたりご指導いただきました国文学研究資料館の太田尚宏先生はじめ、アーカイブズ・カレッジの講師の先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また、本稿で報告した牟山神社所蔵資料群の整理活動は、愛銀教育文化財団より助成を受け実施しているものです（事業名「地域に伝わる古文書・古写真・映像フィルムなどの保存・整備と活用―朝倉地区の歴史・文化の継承に向けて―」牟山神社氏子総代名義で申請・2021年採択）。記して感謝申し上げます。